

## 終日

白い光が空から部屋へ  
ピアノは電線を綱渡り  
緑の時計はそっぽを向いて  
外は多分に風強く

見るものの全ては奥行をもち  
それがつまりは少しの哀しみ  
涼しい静寂  
薄められた色彩

狭い部屋が壁を失い  
時間を、そして空間を拡げ  
ミクロから宇宙まで  
僕は放浪に投げ出される

ああ、悲しむべきは全ゆる生命  
太鼓に合わせて嬉々として踊り狂い  
はかない楽園を駆け回り  
遂にはトロンボーンに震え上がる

道化師の涙は埃にまみれるだろう  
ああ、いっそのこと干上がるがいい  
全ては夜の中にうずくまっている  
たったひとりで

うごめき、ひしめき合う者たち  
あちこちから鳴り響く行進曲は  
てんでバラバラで雑多なリズム  
一体どれに合わせたらいいのか

終息はなく、ただ果てしなく  
鈍い頭痛が間延びした流れを  
粘液のような時に流し込む  
ああ、いっそ滝のように落ちるがいい

想う意と暇いとまもなく

忍び寄る、心臓を波立たせるリズム  
絶え間ない変調と変拍子  
ああ、いっそ全て無に帰すがいい

最初はさざめくように  
そして次第に戦いを始め  
ついにはとてつもない騒音へ  
その繰り返しばかり

嵐の中に流れる甘美なハーブ  
穏やかな晴天を裂くヴァイオリン

騒音の中を過ぎる冷たい静寂  
おお、母はる大地は何処へ消えたのか

悠久なる夕陽は雲に沈み  
掃いたような雲が遥かに消えゆく時  
ただその時のみ僕は信じるだけだ  
我らの生命の行方を

(1987.4.23)